

地中海

MARE MEDITERRANEUM

2024. 5



令和6年5月1日発行(毎月1回1日発行)第72巻第5号

No.792

創刊理念

文化としての地中海、そうした概念が近代思想の郷愁として最近うかび上ってきた。それは、ローマでも、ギリシャでもなく、エジプトでもない。もっと古い発生的なものだ。別ないいかたをすれば、地中海的なクリマ、明朗で明るく、同時に人間的な感情とつよい同化力。あらゆる大陸の奥地から南下して北上した、すべての未開なものを同化してきた大きな力、——それをホメロス以来ピカソでも、ブラックでも、シロニーでも、みなおなじ気持であこがれる。

源泉的精神の、本質的な方向を指向するもの、それが「地中海」である。

地中海

二〇二四年 五月号 (通卷七九二号)

◇今月の二十首詠……旅のパンフレット 田土才恵 2

■作品A 高津砂千子・滝田靖子他 4

A 鷹野長子他 20

B 田端典子他 44

C 出口和子他 55

A 岩井久美子他 68

■オリーブ集 浅川広子・有馬さと子他 36

◇今月の二人 齐藤順子・松井春枝 16

■鑑賞・三好直太の歌 10 〈草の絮〉 久我田鶴子 15

私と短歌との出会い (261) 梅本武義 19

■〈第一歌集を読む〉14 田土才恵歌集『かざぐるま』 32

―風をうたう― 泉 嘉穂子

◇シルクロード・カフェ ―― 【責任編集】 木村文子 42

■遊覧寄港へ『源氏物語』を読む 光広祥子 34

■歌壇月旦 短歌の「不易流行」 35

もとむらしげと

■三月号作品批評 60

A……滝田靖子・本元由美子

浜谷久子・藤川淳子

B……藤澤元子・藤森巳行

C……国原喜美子

オリーブ集……田土才恵

今月の二人・作品評 久我田鶴子 18

最近の歌誌より 79

〔編集部〕

クリップ……80 神田通信……表3

(表紙デザイン) Tazuko Kuga

旅のパンフレット

田土 才恵

ゆりかもめ泊ている舟に尾を揃え数羽がとまる福良の湊

お登勢の名響く日のあるこの館阿波人形浄瑠璃に湧け

語れるは若者という浄瑠璃にこの日ひっそり建つ館あり

しんとして今は音せぬこの舞台演じる人の魂こもらせて

並びいる人形浄瑠璃の木偶の面彫りたる人のそれぞれの顔

観光船湊に泊てて日を浴びる渦潮を観し歓声も乗せ

ほとばしる春の愉しさ潮騒はうれしたのしと小石をゆする

くれないに空の焼けゆく城下町大空たかく重機の点滅

昭和十七年生まれ
昭和三十九年地中海入社
歌集に「かざぐるま」他がある
宙の会グループ長

ただ黒き塊の巨木に鳴き初めし小鳥のありて朝が始まる

蒸し暑き京の盆地に堀川の水音低く流れては消ゆ

高瀬舟通いゆきたる堀川の流れの上に走れる道路

堀割へ下る石段の川床を流れて久し堀川の水

その先は暗渠に変わりなお下る京の都をひそかに遠く

残しゆくものなどあらぬ一生とも描きし色紙もて余しおり

暖房の風の流れに揺れているカレンダーはときを刻めるひとつ

ささやかなよろこびとしてコーラスに一世をかける残りの時間

残り物サラダにスープ・デザートもありて昼餉は満たされてゆく

頬杖をつけば凭るるころまですっぱり身のうちにまどろみを呼ぶ

はるかなる海原を恋うひとり旅パンフレットの中にし遊ぶ

諦めて閉じては開く旅パンフ水芭蕉咲く尾瀬遙かなり

作品 A

高津砂千子

ミモザ

・風

満員の電車のなかで一束のミモザの花に救われている
 すっぱりと宮島おおう朝のもや連絡船の音のみひびく
 みずがめに張りし氷の溶けつつも物干すわれの姿うつせり
 春浅き光さしくる縁がわに紅梅ながむ音なく散るを
 石畳の上を流るるせせらぎのきよらかな音に心はずみく
 昨日今日激しく交わる寒暖に待ちかねたるも弥生忙しき
 寒戻る今宵はおでんにしようかと一枚重ねくりや辺に立つ

滝田 靖子

古書店

・新

ぎつしりと書きこみのある唐詩集古書店の最下段に並ぶ
 書きこみがあるけどいいんですか？聞くかなだつて売ってるんでせう
 書きこみのある本二冊はじめから買ふと決めてゐる面白さうだし
 コンピューターシステムトラブル混乱は機械のせると言つてらしい
 申し訳ございませんを繰り返すおはやうと同じやうな口調で
 申し訳ございませんとは言ふけれど理解・協力は強制なんだな
 天気予報通りに降り来たる雪の本説む間を積もりて真白

高尾 恭子

雪の校庭

・大

赤鬼にされた子ども逃げまどう足あと消えた雪の校庭
 級長の久ちゃん散歩をするように山のかなたのホスピスめざす
 二月堂ふたり歩けばまれまれに薄日さし来て落葉ひかる
 ドングリは拾わぬけれど杳き日の落ち葉踏む音さくさく響く
 ドタキャンをしちまってゴメン スノーピーの次のスタンプずとずと待つ
 新札は九十一とぞ天折の二十四、五十一去るものは風
 足あとに小さく名前をきざみつけ過去と明日のはざまをねむる

田土 成彦

灯

・宙

マンションの窓の明かりがひとつ点き綴られて行く一つ人生
 関りはなけれど一つ灯の点いてあそこは独居老人の家
 壊れかけの長屋がひとつまた空いてすつかりみんな空き家になつた
 二十年この方空き家の壊されて駐車場となる景色一変
 産土に一月ぶりの参拝は賽銭五十円用意してゆく
 アイスを食べあと熱々のお茶を飲む何だらうこの意識の矛盾
 今日勤めはたしし思ひに出るトイレ心浮き立つ事もなき日々

田土才惠

交流

・宙

Tooさんの一家元氣とウクリスマスカード今年もタイから届くおかあさんと呼ばれて久しタイ人も中国人もみなわが家族三十年越えて今なお交流の続く縁を深く思えり

人のため生きる時間のあればとて思いめぐらすこの手のひらよ背丈伸びつきつぎわれを越す孫にいつまで続くわれの未来は
囲碁掃り業務スーパリーのさつまいも「甘太くん」下げて掃りくる夫
焼き芋に「甘太くん」良しと目を置かず買いくる夫の誇らしげなる

玉井綾子

授業参観

・羊

タブレット・教科書・水筒・ジャージ入れ通学バッグのファスナーの死ぬ
中学の授業参観に見る吾子はクラス半分のマスクのひとり
挙手せずに意見言う子の多くいて中学国語の授業は進む
教室の後ろから見る椅子の下 かかと踏んだり半分脱げたり
後方の黒板上に吾の知らぬ補習の知らせあり写メを撮る
級友と先生からよく名があがる子の親へ声をかけずに帰る
授業中よく名の出でし級友について聞く参観日の夕食

中島央子

二月

・森

寒の雨冷たく過ぎる庭の隅曼珠沙華の葉みどりしたたる
二月の雨降りやみて紫陽花は緑の新芽生れいつるなり
ひかり降り光をかへす川の面輕鴨今日は仲間のをらず
アイロンの余熱を今日も当てる手製のマスク冬はぬくとし
食卓に欠かさぬお多福・うづら豆気付けば既に鬼やらひ過ぐ
マイル溜めまた外国へゆく娘世界の地図に探すヒンドウの街
寒暖のはげしき日々に痛む肩鍼灸院の針にたよれる

永田進一

二合の酒

・山

春めきて足裏^{つら}やさしき公園の池より子鴨の群れて翔びたつ
剣道をやっていると孫言いき乗稽古などしておるのかも
岩欄む木の根のありぬ人の世も一念発起吾子への期待
日本語は○で終りぬ×でなくやさしき言葉ふわりまるめる
思い出の歌の一節口遊む八代亜紀逝く舟唄恋し
生きている証ならむか葉飲む血圧の記録朝夕の習い
一書にいう紅旗西戎吾事に非ず二合の酒に白楽天の詩

永塚節子

会話

・銀

足音をしのばせ近づくと花の際気配にさっと目白飛び立つ
三度目の桜のたより聞近くも終りは見えぬから二年
そちらから見ればこちらは異界ともつきつき起る戦さ終らず
門の辺に咲き梅は「道しるべ」さみしき折の紅ぞよし
冬の日に長く伸びたるわが影を生きの証と踏みゆく朝
折にふれ気づかさるは身の内より消えたる言の葉未と希望
「十年は」医師の言葉に答えたり「そこまで持てば充分です」

仲西正子

金婚の庭

・沖

真綿なる婚礼布団おもければ納屋に取り置くしばらくはまた
婚礼の右にて並ぶ君に縫いし仙台平の袴は褪せず
九年母も挽わに熟れてつつがなし今朝は踏みしむ金婚の庭
雑然の庭にてあれど声落とし木の実落として遊べる小鳥
この庭のあらかた小鳥の落としものシンボルツリーの背き鳥木も
きらめきの金管楽器に目もくれず夫は奥にてハーモニカ買う
陳列の金管楽器の暗れやかさ秋暗れの空パレードの夢

中村博子

西御坊

・漣

ちち母を伴ない輪島へ行きし日や遙か彼方のわが運転に
兼六園、千里浜海岸、遥空の幕指で輪島の朝市めぐりし
無残にも瓦礫と化したる能登災害 輪島、七尾や訪ねし遠き日
幼き日銀杏拾いしちようの樹あまたの瘤にそそぐ冬の陽
西御坊本堂へ上がり初めての合掌なして義援金箱へ
境内のベンチに幼き想い出をめぐらすわれへ話しくる僧侶
山階校見つつ訪ねし東御坊運如上人を止まり見上ぐる

西堤啓子

ひとり

・天

高く高く舞うツルの群れつぐめばわたしも連れて海を越え飛べ
ツルのごと飛び離りゆけばはるかなりサバイバルゲームのような日常
「きつとまた来よう」と告げる君がいた カンポ広場に影を並べて
ひとり見下ろす港の夜景 失った日々はきらきらボンボンシヨコラ
鎖されたモンゴメリーの晩年を聞けばアン泣くわたくしも泣く
この人はあの人ではない何者か 不条理が叫ぶ「君はこわれている」
散文では語れぬ日々を重ねるを圧してのばして詩に成型す

白子れい

コロナの日々

・洛

疏水べり桜の細き枝先の蕾ふくらむひと朝ごとに
朝の散歩疏水の水のせかれて小島も居らず人も少なし
塞かれる疏水の底の澄む水に鮎の夫婦か二匹連れだつ
背空に枝をひろげて梅の花今年もわが家の庭をいろどる
庭の梅小きき花をつけており何故か今年は花の小さき
そよと吹く風にさそわれ散りきたる梅の花びら吾の手のひらに
紅白の椿が庭に咲きいるも愛するは吾のみコロナの日々は

ばばりょうこ

貴女を思う

・鹿

音も無く雪は降りたりややにして慌ただしくも溶けてしまいいぬ
このひと夜「鶯雀の歌」をとり出して彌生さんの一人語りと真向かう
きみの歌に声出して読めばあなんときみの声も和す懐かしき声音の
ぬくとき音感ただよいをわが声に添わせてよみ継ぐうつつものは
夫君の永久なる在所におろがみしは 是るかなる日の毛原山里
一冊の扉を閉じたその音の余韻を曳きて貴女を思う
「小鳥来て」亡き御夫君の銘皿には かるかんが似合う 南の銘菓

浜谷久子

声

・地

新年の無事祈る日を破壊する大地震の報情報少なく
日を経るほど増す大被害半島へ届いているか救援の手が
各自治体企業団体連携の救援活動意思疎通が鍵
基点となる阪神・淡路大震災 自衛隊NGO企業国民
明らかになる被災状況限られて民間ボランティア入り始めると
航空機事故の誘導被災時の宿の誘導無事を導く
くり返す「逃げて下さい」消えぬ声その時耳に鳴り響くだろう

檜垣美保子

赤

・昴

闇の夜を押しひらき来るまほろしよ願わくはそよぐ螢火よ来よ
夢であれ現実であれ来るものを拒めず夢に人間あらわる
神主の装束のおとこ風にむかい横断歩道を渡りいすこへ
まだかたきつぼみのままに地に落ちて先っぽの赤失りていたり
目のふちの白きわっかが見え隠れめじろは花を訪ね訪ねて
おさなごがふりむき駆けたす両の手をひろげ迎うるその人がママ
「さよなら」を「さはよばなばらば」遠き日の言葉遊びは眺ねて弾んで

福田庸子 夕光 今

夕光のさし入る森にきらめける檜の葉冬をすこやかにして
枯草のおほふ畑地に実を探す小さき鳥らつきつきと来て
パンを千切る指にしみくる冷たさよ母居らぬ部屋に空を見てゐる
横書きに慣らさるるまま過こしてはるかなる昭和をふり返る日も
パレスチナと輪島の映像重なりし人間の欲が地球壊せる
元日を狙ひ打ちさるる心地せり地球の怒り能登半島に
豊かさを求むる人間の仕業にて二十一世紀地球危ふし

藤田美智子 春の土 新

みどりこの発語のごとし雪解けの土を分けたる水仙の芽は
白鳥を発たせしのちの阿武隈の川面平たく光を伸ばす
「ゆるく生きよ」われには易きことならずゆるくゆるくと春の土踏む
ずたずたになりしと電話かけきたりなせこんな日を雨強く降る
新月に光を放つ夜のあらむ洞の底なる燃料デブリ
大地震の教へくれたる危ふさを知らざる顔に再稼働言ふ
原発の後出し情報に馴らされて桜の開花宣言を待つ

藤森巳行 人生 銀

友は言ふいい人たちは先に逝く残りし我らは悪人だらうか
うたへ叫べ我が魂よ歌となれ怒涛の人生まだまだ続く
歩み来し我が人生に師匠あり誇りがありて歌がありけり
ふる里があるから俺は生きられる錦は心に飾つてゐるさ
海路なき埼玉県に空の道ありて旅客機我が頭上飛ぶ
口を衝き思はず出た歌「さだめ川」妻の寝顔を見つめてゐたら
イクメンを軟弱者と蔑みしさういふ時代を我らは生きたり

船田清子 香りはなくて 天

せめぎ合ふ暖氣と寒氣が呼ぶ春を待ち望みつきさらぎをゆく
沈丁花の蕾一斉に出そろふと聞きて帰ればわが家も同じ
噴き出でし沈丁花の花芽翌日は早く咲き出づ香りはなくて
いただきし岐阜の站なり身にまとふ苔の香りはいつこへ消えし
葱・大葉・玉ねぎなどなど失ひし香りはいつこ食卓悲し
日本への原爆投下を悔いてゐるアメリカ人はいかほどなりや
頬に降る細かき雨のやさしさや傘はささずて身に染めながら

本元由美子 芽吹き 岡

赤き芽の薔薇の芽吹きは一斉で明るい春を颯ひ出でたり
霞立つ今朝のわが庭見巡ればスノードロップ俯きて咲けり
風花の止めば日の照る川土手に霜に焼けたる酸葉ひかりぬ
白梅の靨り立ちたる産土のやよひの春のコート脱ぎたり
弥生たつあしたの庭にぬれて咲く水仙の花姑にそなふべし
門前の青石通りに雨に濡れ美保の神社の懐しきをしる
山陰に一日遊びて珈琲の焙煎薫る店に寛ぐ

牧 雄彦 春きざす朝 大

正月の二日に逝きし友ありて六日前のメールまた読む
逝きし友の家を過ぎたりながなし「おう」といふ声聞く思ひして
里山のなだりの辛夷はや小さきつぼみを見たれり春きざす朝
巨き樹のちからぞ積める石垣を崩してうねうね根は土を這ふ
緋の袴つと社殿出で廁へと消えたり午後冬の冬の日高し
神官の若きが枯れ木にもたれるてスマホ操る昼下りなり
ちかちかとはばきの葉群ひからせてひと気なき山夕つ日が差す

松浦禎子 祝日

・羊

目の前を米寿のひと日過ぎゆくにまだひそかにもうたを詠む道二度ゆれに瓦礫となりし家の前に老婆のうしろわたしのいつか歩けなくなつた時にと手配する老人施設のカタログ二、三白壁の蔵の庇を行き交える巢ごもる鳥と童女の影と紀元節とう祝日ありき姉三人もんべ姿の時ほるかなり手術とう手当てまだある股関節まだ歩きたいわれの生のため還暦を迎えし息子が米寿なるわれに付きそう時なり如何

松永智子 待つ

・嵐

にんげんの声物の音いまだなきビルのひとくま目ざめ待つ音さりながらさりながらを裡にして山の頂きに日の射すを待つ何待つといふにあらぬに音のなきビルのひとくま待つ人の声真夜にきくにんげんの声われを呼ぶ声にはあらず遠くなりゆく待つことの多き一世とおもひつつ音なき闇の明けゆくを待つ夜半目ざめ聞くとなく聞くにんげんの声とほくなり互みに呼び合ふ人の声待つにあらぬに闇にさめ遠くなりゆく声あればきく

松本多摩子

異常気象

・桜

春一番日本列島吹きました四月の気温と異常気象の中汗ばみて庭の草とる二月尽異常気象の夏を恐れる

仏壇の視界の中に父母の写真はありて話しかける日々春の花あふれるスタジオオオタニのシーズン告げる春は来にけり今日一日四四六と呼ばれ過ぐ白内障の手術近づく

幼き日「お菓のめたね」CMに励まされいし孫京大生剪定後庭を歩けば新参者小さき木々の仲間入り見ゆ

三浦好博

鬼たちよ

・鏡

世の悪をすべて引き受け追はれる鬼たちよさあ我が家に来たれ値上げせぬドーナツ穴のでかくなり確かに世の中良く見えにけり買ひていく置物にして「オクトパス」受験シーズンの真面目な親子「真金の真相究明困るよナ！こんなうま味は知られたくない」「黒肌は何か問題ありますか」年十数回就職質問身も心も折れてゐるらむジエノサイドにユダヤのタニエル・パレンボインは特高の跋扈するロシア ナワリヌイは九十年前の小林多喜二

三木まり

誓

・昂

羽根切られ渡れぬ白鳥こうこうと仲間を呼ぶか湖のほとりに薄氷の張る湖に残り白鳥は翼をたたんで小さく眠る深々と羽根にくちばし埋め眠る白鳥一羽の夢に幸あれ銀の星、背い彗星さがす夜の白鳥眠る湖は静かひと足もふた足も先に黄泉の友 新月に逢おう夜を待とう風荒ぶ早朝の庭の北隅に冬の童のいのち鮮やか吹き荒ぶ風ふと止んで遙く草に風の葉を挟んで帰ろう

宮本靖彦

紹興の友

・凌

北国ゆ寒波の予告陽は照れど頬打つ風の針打つことしぬくもりのはつかに兆す如月も単月予宿の北冬ごもり立春の光に三椶花開く紹興の友ら如何に過ごすやみつまたの白花今年も庭かざる紹興の地では迎春花と呼ぶチューリップの芽揃ふ欲に草萌えて横の狸の笑みあることし服チョッキ着たる街犬多けれどわがクロはだかで十七年生きし駐車場の片隅に立つ枯すすき寒風に負けず形そろへて

不用品ありませんかと問う電話もっぱらにして疎ましじつに
紅灯の巷に遠く大根のはだえに残る土洗ひおり

湯上りにクリームを塗るひびわれし十指手の甲手のひらを握ね
いま・ここの〈微〉にこだわれば片蔭に蔭の苞におひ初めたり
寝入りばな破戒坊主の禿人の面額たしめてしまらく留める
おおかたは語らずに行く日々ほとりに背き梅の満ちたり
父親の自転車を借り遊びたり三角乗りのスタイル堅く

御代田澄江

ドラセナ愛・哀

・茨

ドラセナマッサンギアナ咲き終へて萎えゆくさみし人世見る如
厳冬の底に生まれし吾なれば底を蹴るがに上向き生きむ

紅白歌合戦を乱されハダカ人乱入すテレビ消しラジオ消し除夜の鐘聞けず
能登の被災者にあげたしと次男自の車整備会社の社長に託す
茨城空港ゆ四時間の旅と長男夫婦台湾旅行社土産故宮博物院の葉美し
七歳で脳腫瘍に逝きし子を悼む母の投書に涙腺ゆるむ
何時しかに庭より消えし矢車菊あの花の青今し恋ほしも

茂木

斌

免許更新

・埼

退院する朝の寒気さへ苦にならず元日まではあと三日なり

「花巡る一本の杖あるかきり」二本の杖に病院を出づ

買ひ換へし軽カーにこの先三年のハンドルのため更新に行く
車椅子を息子に押され免許センターに視力検査の椅子に向かへり
その昔もらひし百円ライターの「点火太平」なつかしきかな
元日を控へて退院したけれど初詣など御法度なりし

お笑ひは健康によし落語家の桂文珍篠山生れ

プーチンの朝の食卓に届かない垂乳根たちの嘔り泣く声
宮殿の庭にひかりの森ありぬプーチン散步す策略の羽辺
いくつもの葉瓶ならぶ棚の前これを使えとひとつを遣ふ
プーチンに反旗ひるがえす髭面の男は忽ち世界から消ゆ
プーチンは片頬で笑む政敵の死の知らせありし朝の卓にて
国中に反論は満ちプーチンの巡りは穏やかな風吹くばかり
独裁者ゼレンスキーの名を刻む碑あり荒れ果つる向日葵畑

桃原佳子

浅春

・沖

ジョギングに上気する顔の駆け抜けて朝の町並じんわり明るむ
病院の待合室に手を擦りランナーのように白き息吐く
立春過ぎ庭隅に日毎萌え咲くオキザリスの花励ますごとく
火鉢とビニール袋を携えて道の辺のゴミを皆んなで拾う
着膨れて畑に出掛ければ露の盞小花を詰めて土より出でし
草なれど春には春の花が咲き畦道ながめ心浮き立つ
住む人も家も老いたり暖かき今日は二人で窓を拭きたり

山下雅子

兆す

・習

ふと転び打撲の思わぬ痛み強しリハビリ施設へしばし身を寄す
独り住むわが家へ戻るを旨指す日々なだめなだむる痛みしつこし
リハビリ士と歩行するわが足元より春の萌しひかり明るし
きさらぎの光あまねき窓の辺にランチのオレンジ香り立つなり
ゆくりなき世界の小澤氏の計の報せ人のいのちの厳しさ迫る
ありありと桐朋の廊にすれ違ひし紺のとっくりセーターの小澤氏
タクトを振る世界の小澤の乗の音を生み出すいのちの尊厳思ふ

山野幸司 雨

・沖

雨上がり光差しくる居間一人妻の寝息に心落ち着く
 風に揺れメジロに揺れる梅の下花びら舞えり春の一番
 剪定の屑積む畑に幼虫のしっかり眠る地の揺り籠
 田浦へ向かう県道案内板たどればひらくバックザフィーチャー
 わが車渡る術なきフアンタジー邑子・良三田浦の海
 田浦の海の夕陽のシルエット昔のままの駿島浮かぶ
 生協さんいつもの時間ベル鳴らす言葉変わらぬ平和の証

山本 孟

北風の吹く日

・大

知らぬ間に友も知人も音沙汰なし我も亡きかと連絡はなし
 いくつに見える。70代といふ人に、92。へえええ。よしよし
 北風の吹く日『日本精神史』読みすすむうち熱の帯びくる
 紅梅の見ゆる部屋にて補聴器をはづし本読む静謐の中
 身を固く目の離せなきフアシズムの章の現実『日本精神史』
 あひ対し話しに夢中の感じして本より目離せば孤りなりけり
 特攻は今は無入機に替はりあて、ああ若き命の帰りに来ざりき

養学登志子

立雛

・凌

あたたかいところで冬を越したいと亀虫の来てほろと死にけり
 恵方向き黙して食ぶる寿司を巻きおもしろうもなやひとりというは
 寒餅の魚目かんばし善哉をゆっくり食ぶなごり雪の日
 里の山は桃色ならむ立雛切子の淡き金平糖のかけ
 樂觀も悲観もあらず癒を連れおもしろう詠みし和尚の遷化
 生きるのは飽きしと言ひし五十の頃八十を過ぎ何とも言わぬ
 さびしきは幼い日からつき添いて終まで共にと片方はなれぬ

横田敏子

十三年

・福

茜空に三本伸びたる飛行雲 往きか帰るか機上の人
 雛人形仕舞いし玄関さみしくて黄のチューリップ買いに行きたし
 啓蟄は大雪となり冬こもる虫よ焦るなもうひと眠り
 春の雪消えてまた降り今日も降る未練がましき男のように
 能登の海放射能洩れぬは 幸ぞ 復興となれ『日本海の幸』
 四度目の処理水放出始まりて当然のように慣らされてゆく
 ふる里に還りし人も還らざる人もそれぞれに重し 十三年は

磯田ひさ子

梅の王

・森

山原の広らに梅の林ありおしとどしとど花の咲き出づ
 くれなゐも薄紅梅もしろたへも己がじしなる色に咲きたり
 太き枝を四方に廻らし梅の王 花もろともに白加賀まふし
 少納言 濃きも薄きも紅梅と書き残したりさんざうらふや
 盛んなる細胞分裂してをらむ木連和毛の苞につつまれ
 山潜る水の注げる池の縁かすかに濁し鯉のあらはる
 大いなる慈悲と思ひぬ姿哲もなき青空に白き雲浮く

市原やよひ

手紙

・萬

先生に憧れ教師になりました厚き封書は夫の教え子
 先生のここに惹かれしと箇条書き項目多しその報告書
 若き夫手紙の中に躍動し我も帰りにぬその画の中に
 彼も又校長務め古希越ゆと一瞬戸惑う過ぎたる日に
 アルバムの夫の笑顔に会う夕べ佳しき悔いのわずか解けゆく
 はっきりと「帰ったらビール飲みたいな」あの病室のあの夫の顔
 知らぬ間に我が名彫られしグラス上ぐ遺影の夫は今日誕生日

梅本 武義

選挙

・羊

革新の若き日ありき今は保守選挙を棄権したることなし
 同じ人が違ふ候補者連れて来る地区の顔役地方の選挙
 小火騒ぎにて済み大過なき里に野焼きのような烟跡を見る
 何時の間に起きた断絶老人会無用を古稀言ひ傘寿が黙す
 執行部全員入党する案の我のみ反対して流れたり
 清廉な政治家僅少権力の小さき野党に裏金出来ず
 令和六年嫌いな一字はや決まるプーチンの「プ」トランプの「P」

大 浪 美 雪

猫と

・森

房総に冬の雷鳴りつきぬぶり起しならぬ何を起こすや
 西風に乱れ降る雪ぼたん雪ガラスの窓に張りつきては消ゆ
 キッチンの窓に吹きつくぼたん雪見つめるわれと向ひ家の猫と
 朝の陽に架線に積りし雪の落つひらつひらつと鳥飛ぶやうに
 松が枝より落ちつつ雪のくだけ散り霧状となり虹を見せをり
 雪降るとわかつてゐたか蟻塚は切りたる秀枝に卵窠のあり
 二月の水の匂ひのする風に面上げゆかな春はもうそこ

奥 田 陽 子

啓翁桜

・羊

蕾解けくれないとなる店頭啓翁桜のさきはな花
 山形の生まれとぞ聞く一月の啓翁桜並に挿しゆく
 切り込みを入れよの指示に従いて生けたる桜ほどききたれり
 考えごととして水のおふれたる如雨露となりぬ空は夕焼
 夜の明けに多数の雪のつぶ舞いて冷ゆる地上を濡らしてゆけり
 いまだ薄きひかりの空へ球根は小児のごとく顔を出だせり
 花挿せるその一隅の明るむと笑みありて知る春の近きを

小 野 雅 子

ティスコン

・羊

七十、八十、九十代が集ひ来てティスコン・ゲームに歓声あぐる
 ティスク投げ黄色の的に近づける一瞬なれど真剣になる
 滑らせて投げたつもりが裏返り赤より青へ勝利の移る
 補聴器の値段くらべも始まりぬ高ければよいといふのでもなく
 補聴器をつけながら吹くハーモニカ得意のしらべは「丘を越えて」
 雪だるま作る子らなく一面になめらかなまま一夜を過ぐる
 風呂の沸く早さに気温上がれるを知らざるなり二月も終る

神 田 鈴 子

花と時計

・大

シクラメン、シンビジュウムに胡蝶蘭部屋の中には春が来てる
 三、四年の歳月経しも花ひらき独り居の部屋日毎明るむ
 ひねもすを花びら散らすさざんくわの花数やうやう少なくなりぬ
 沈丁花の蕾はややにふくらみて風やはらかな春を待ちある
 愛用の時計を落とし交番へパーセントの善意待みて
 半額のグッチの時計を得むとして寒風すさぶ長蛇の列に
 手に入れし時計の文字を確かむれど失ひしグッチをなほも恋しむ

上 林 節 江

警報

・濟

暖冬のこころ緩びを衝くようになんどう返しの雪の警報
 天と地のさかいかもつかずにび色を乱して雪は横一文字
 仙台が北国なるを思い知る洞にかがまる隙となりて
 二日ぶりにポストを開けて手にしたる友の絵手紙つめたく湿る
 さす光薄うすなれど散歩する深く大きく息を吸うため
 ハセンチの積雪とぞよ娘の暮らす練馬区映る白きひといろ
 まことかと心ざわめくウクライナに厭戦気分の生まれいとぞ

菊地 栄子

いぶし銀

・海

既にして刈取り終えし沿線のおちこちみどりの稲田いねだをよく
売店に前金支払いコーヒーはセルフサービス時代は移る
集落のいぶし銀放つ屋根瓦ようやく旅に来たる心地す
にわか雨晴れたるらしもわが耳にパンザイパンザイ電車が軋む
反対の駅の方角を指し示し名古屋男子は臆面もなし
発展は河川にありしか秋の日の木曾川掛斐川眩しみて越ゆ
コロナ禍に三年を籠もりうつし世に踏み感いいるひとりと思ふ

草刈 十郎

連根

・世

人生の回想しきりこの夜長行きつ戻りつ朝となるなり
表情はマスクの中に隠しつつ素知らぬふりして話題にもどる
防衛費増額増税大臣のうしろに戦争立つてゐるなり
歟いらず掘る連根は威勢よきホースの水で掘り上ぐるなり
新聞や郵便牛乳ヤクルトの屈く勤労感謝の日
毎日の戦火のニュース途絶えぬまま統きゆくなり新年なれど
元日や能登の地震に暮れゆきて空港惨事まだまだ二日

河野 繁子

受け取る

・雁

パソコンの誤動作おこす午前四時私の時間のぬくもるを待つ
原稿を打ちたく始めしパソコンのひらがな打ちをいまだ変えずに
若きらに教えを乞えばパソコンのひらがな打ちにまずは蹟く
受け取りし時間少なく生きくれば老いてなおさら単純が好き
美容院の小さな犬がひょこりとわが膝にきてぬくもり伝う
わが心見すかすようにまん丸く腫みひらく小さな縁
もやのなか月のような日の出なり二月二十日の朝が始まる

小林 能子

鉄の絆

・羊

車座に飲みて静かに「アリラン」を唄ひ日本人も韓国語学べと
『韓国語(発音)』冊子が頼り入管の職員と通ひし長屋の私塾
兵役を終へて来れる若きらが床踏み鳴らし歌ふ「黄色いシャツ」
ひよこのメス・オス弁別の技術養鶏のかなめ聞きつつ直日の午後
李さんは浦項より来て鉄の絆とつとつ語り「愛してる」唄ひき
新大久保駅転落事故二十一年忌その留学生の母も居並ぶ
パティ・キムの「ソウル讃歌」が風に乗り近き韓国ときには遠く

近藤 栄昭

認知症検査

・虹

毎日を唄えて過ごす頭文字認知症検査絵図の記憶に
攻路本出るほどの検査厚すぎるあれが読めればきつと満点
高齢者認知症検査ご褒美に得点増やして無慮反者に
ペレトマト認知症検査Bボタンいよいよ始まるわれの評価が
少し見せ他の作業で気をそらせ意地悪い事認知症検査は
お唱えの認知症検査に効き目あり世の中明るいまだ現役と
高齢者の認知症検査に兵器の名戦争身近と記憶させいる

近藤 芳仙

梵鐘

・信

寺いくつならぶ真田の城下町朝夕の梵鐘ぼんねは自然のリズム
逆さ霧のけふも降りくる太郎山 上田盆地の風が冷えそむ
夕暮は良く知る頃と思ひしも夜と朝との間まを知らず
ふはふはと蓋りがはしき思ひもて過ぎる数日やうやく収束おひ
赤き実を差しはさむ嘴くちばしつき出して枝うつるもす歯科の窓辺に
目に見えぬ匂ひを吸ふといふ菓子子のデリケートそと伍にしまひぬ
ひろはむとするととき膝に痛みあり何をすることも時間がかかる

坂上直美

桐島聡

・天

ヴェランダに霧迫り来て吾を包むすでにして吾は迷い子なるに
五十年昔のある日東京の空からガラスが地に降り注ぐ
名を捨てて故郷を捨てて五十年ひとり死んだ桐島聡
「幸せにできないから」と結婚もせずに終わった桐島聡
最期には桐島聡で死にたいと痛の末期に思った男
ベットポトル弁当がらの散らばった小さな部屋を遺した男
名を隠し罪を隠して生きて来し桐島聡その五十年

坂出裕子

白梅

・洛

もう春はそこに来ると川波が流れゆくなりきらめきながら
真つ直ぐに空を眺めて雲を見て春の気配を胸にいたたく
白梅の花ほころびぬ小さな淡きみどりの蕾なりしが
川べりの散歩の道に拾ひたるくれなる木の实今日のしあはせ
冬枯れの道に静かにまろびるし木の実いたたく散歩の友に
山茶花のはなびら拾ふ背をそつとあたためくるる朝の光が
もうすぐに春が来るよとあたたくはげましくるる小春日和が

佐藤道子

戦争

・甲

着たまま寝て夜毎駆け込む防空壕B29の音に目覚めて
B29頭上を通る一瞬を息殺し待つ爆弾落つかと
疎開先の防空壕での直撃死向かひの可愛いおかつばの子が
四谷の空真赤に焼けて雲真赤焼土作戦はじまりしより
ガザの人の苦しき想ふ焼野ヶ原となりし東京
米の代はりの大豆萍の配給を並び待ちぬ通帳持ちて
何時にても如何なる時も戦争は無きこと願ふ戦中世代

篠原まり子

明け暮れ

・羊

春一番春の嵐に一通の安否確認ポストに落とす
フレームスを生まれし故郷中国で世界の小澤セイジの涙
近場なるコンビニに足しげしげと買い慣れたるは寂しくもあり
望月は東の空に煌煌と天地の災い祈るほかなし
思惟深き人の手紙を読み返し整理整頓出来ぬあけくれ
夕暮れは肩の小鳥を巣に帰す小さきものの小さきいのち
零れたる花粒ひとつ惜しみたる過去形ばかりのミモザの黄色

柴田登志恵

百花

・天

マンションの高層階に冬越ゆる養蜂箱の祈りの羽ばたき
海べりの高層マンションの巣箱から採りし蜜とふ潮の香りす
この街の百花に集めし蜂の蜜実生レモンと相性よろし
地震のあと更地のままも紐張りトジャズ・スィングに蜜蜂飛びき
女王は娘蜂と寄り合ひあたままり花野恋ひつつ今日を生きぬく
北へゆく背黒鬣の翼音にはつか明るむ蜜蜂の群れ
うす紅と藍のあはひを目が昇る列島に地震津波の多し

須川千恵香

理香の急死

・眉

人生は穏やかならず選歴を待たず二女逝く蜘蛛膜下に
理香は進路の長として疲れか退職二年早めをり
時はせ吾は透析者送迎を分担以上に吾に尽くしをり
傍くて理香の一世を思ふとき心寄り添ひふと背を撫づる
池北理香二人の息子の母となり共寝きゆ暇なきまま
吾の入院日姉妹で送り翌日も理香も顔見せその夜に他界
愛別離苦 吾子との別れの衝撃に洞の間なり如何で耐ふるや

鈴木結志

花七日

・福

白梅は品格を持ち清楚なり三徳運を呼ぶごとく咲く
 さくら花思考回路もつかの間に「花七日」なりいのちを惜しむ
 一首一法のおしえたつとし日一途詩情にむすぶ視界ひろがる
 微ぶるいの君の御詠歌ゆめたにもなおしかめしやここに残る
 想像にはしるうた詠み自らの認知度はかる語彙の言寄せ
 老いの身に志学のころろ入れかえる思いひとしおみじかうたよむ
 書きさして思いあらたん前向きに日日うたよみてころろやしなう

関根榮子

野茨

・崎

旧友に会いしは四年か五年ぶりカフェに二時間話題は尽きず
 結局は健康ねと書いて別れたり人増えてそめし夕暮の駅
 野に餌の乏しくなりし二月尽庭の小松菜に小鳥等来たり
 椋鳥が雀を追いて占領す咲きし椿の蜜を吸うため
 寒き日の喪美と赤き実の残る野茨見つけて一枝切りぬ
 馴染みたる小間物の店の閉店ししばらく続く喪失感あり
 追風の道に思えり何事に背中を押されしということありや

関根和美

数える

・崎

ちちははが身を慈しみたまいたる幸かぞえつつ寝入るは温し
 義父・母の長寿なりしも脳牙え感謝のべいき穉やかなりき
 わたくしはいかほどの愛のこせるやおの二人と病む娘のなかに
 たつとしたのしきことを数えつつづらき思いをのりこえゆかん
 二人目を授かりようやく家族とぞ水半球に息子ほほえむ
 ルドリユフのアイコンは汝を相くというほっかりと席あげられており
 灰十字ひたいにしるされこの春も悔いあらため四旬節に入りぬ

久我田鶴子

ジョバンニ

・羊

杖つきて歩くを待ちて閏年二月二十九日の銀座くもり日
 雨の降る予報に傘をしのばせて友と見てゐるイタリア映画
 ダウン症の弟うとましき思春期の兄を描きて故しに満ちて
 ためらはずカップのコーン投げ棄てるカップはジュネードの容れ物なれば
 ひとりにて渡る路上に立ち往生それも遊びのつづきのことく
 ついさつきの話に聞きし子のこととひとつなかりにシーンは進み
 とらはれぬころのままに手を伸べるジョバンニすなはちジョーの天真

●新刊紹介

「短歌うたことは辞典」 梅内美華子著

NHK出版(三二〇〇円+税)

「NHK短歌」テキストで連載された「検索・歌ことは」
 「うたことは屋」うたの印象アップ」を再編集し、大幅に加筆
 した。「伝統的な古語から時代を表す新語まで厳選された
 一〇〇〇語と名歌秀歌の鑑賞」の一冊。

この中に取り上げられている香川進の歌

・ うつしみの小さきさきわい落ちん落ちんと踏う花

びらのまえ 「湖の歌」……………【幸い】

・ 沖しるき月夜となれり昼積みしはがねも船にかがやきをら

む 「湾」……………【鋼・刃金】

・ 哲学はハイデルベルク朝まだき道に踏みたるとんぐりさわ
 に 「山麓にて」……………【哲学】